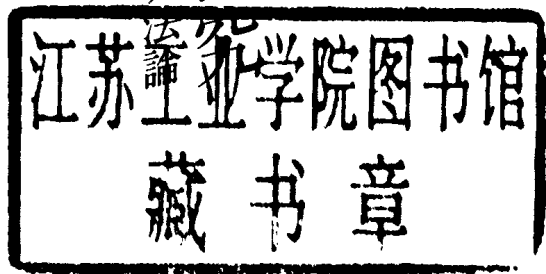


言語研究

方法と方法論

藤原

言語研
方法と方



藤原与一

言語研究 方法と方法論

昭和63年7月5日 第1刷発行

定価 1900円

©著者 藤原与一

発行者 吉田栄治

発行所 株式会社 三弥井書店

〒108 東京都港区三田3-2-6
(03) 452-8069 振替東京 9 21125

凸版印刷・捺染製本

ISBN 4-8382-9020-9 C1039 ¥1900E

目次

はじめに	九
本編 「方法」内化	一三
第一章 研究と体系	一五
一 私が美しい体系を感じたこと	一五
二 生活百般について体系が	一七
三 体系とは	二〇
四 研究は体系	二一
五 表層的体系と思想的体系と	二一
六 体系の意味するもの——「緊縮」	二四
七 知的体系の中に愛情を	二九
八 つねに体系を求めて	三〇
第二章 分析について	三一
一 分析・比較	三一

二	分析の必要	三二
三	分析の二方向	三二
四	分析の本旨	三三
五	分析のありよう	三四
六	声音分析での音素把握	四〇
七	文法上の活用の解釈	四二
八	談話文章の分析	四三
九	一首の和歌の分析	四四
十	むすび	四五
第三章 方法の統合		
一	研究対象と方法単一	四七
二	私の方法自覚へその一つV (国語教育論での二元統合観)	四八
三	高次共時論	四九
四	方法の総合→文化人類学	五一
五	私の統合実践	五三
六	基本総合	六〇
七	おわりに	六〇

第四章 実証と幻想……………六二

一 方法の固定……………六二

二 「もの」を見る……………六三

三 実証科学……………六四

四 実証とは……………六五

五 実証と主観……………六七

六 主観的方法の発展……………六七

七 幻想……………六八

八 研究の理想……………七〇

第五章 アンティテーゼ重要……………七一

〔アンティテーゼ的なもの的重要性〕

一 幻想からさめて考えます……………七一

二 和歌・俳句を横書きで考えてみる……………七一

三 既存の方法にそむくところに新しい発見があるだろう……………七六

四 言語の学と文芸の学……………七八

五 日本語研究のために中国語研究を……………八二

六 懐疑の精神……………八五

第六章 純正言語学……………八七

- 一 言語学……………八七
- 二 言語学と方法論……………八八
- 三 「社会言語学+心理言語学」……………八九
- 四 社会言語学的関心……………九一
- 五 社会言語学の内化……………九二
- 六 社会言語学・心理言語学の二学を総合する概念……………九三
- 七 私の純正言語学思慕の歩み……………九四
- 八 環境の概念と生活の概念……………九七
- 九 環境言語学……………九八

第七章 方法論の旅……………九九

- 一 外国での……………九九
- 二 日本での……………一〇四
- 三 座業での……………一〇五
- 四 方法論不在……………一〇八
- 五 方法への懐疑 方法論の旅……………一一〇

第八章 研究無限……………一一一

一	方法論の旅から……………	一一一
二	校正の時……………	一一四
三	「発表予定はかたづかない。」……………	一一五
四	「無限」の念い……………	一一七
四'	努力による無限化……………	一一七
五	「予定」非限定……………	一一九
六	私事……………	一二〇
七	方言研究者として……………	一二二
八	研究無限の中に貫流するもの……………	一二二
九	方法論としての無限論……………	一二三
	第九章 心の問題……………	一二四
一	研究と心……………	一二四
二	方言調査——言語調査——……………	一二五
三	方言研究……………	一二七
四	民俗研究……………	一二九
五	言語学……………	一三〇
六	研究一般……………	一三一

	七	言語学の原理	一三二
第十章		「心」と「もの」	一三三
第十一章		文章	一三九
	一	文章は考えて書くもの	一三九
	二	「段落」重視	一四三
	三	文章のための漢字	一四九
	四	文章での第一文	一五〇
	五	研究を文章に	一五二
	付	文体について	一五二
結章		「単純」と「深理」	一五四
外編		「方法」遊行	一五七
第一章		徹底模倣	一五九
第二章		カードとともに歩む日々	一六六
		——生活の合理的推進のためにカード法を——	
I		カード(メモ紙)を生活の中に	一六六

一	カードという紙片……………	一六六
二	はじめてカードとりをした人の感想……………	一六九
三	カードと私 人びとにも……………	一七二
Ⅱ	私のカード生活……………	一七五
	一 反省とすすめ……………	
一	カードの知りぞめ……………	一七五
二	『源氏物語』の中の歌を問題にして……………	一七六
三	私のはじめてのカード印刷……………	一七八
四	柳田国男先生のカード……………	一七九
五	カードの大きさとその形……………	一八一
六	カード箱・カード袋……………	一八五
七	先年のカード法経験……………	一八八
第三章	私の周囲に見られるカード生活……………	一九二
一	近親者どものしぜんのカード利用……………	一九二
二	新聞の切りぬき……………	一九六
三	すぐれたカード人たち……………	一九七
第四章	カード法に寄せる私の思い……………	二〇〇

一 「カードは私の分身」と私は思っています……………	二〇〇
二 「カードが私を育てる」と私は思っています……………	二〇一
三 「カード法が私のしごとを体系的に発展させる」と私は思っています……………	二〇五
「カード法」むすび……………	二〇七

あとがき……………	二〇九
-----------	-----

はじめに

言語研究

方法と方法論

どのような言語研究にあっても、研究は、ものごとを究めていく仕事であります。究めることは、無限の仕事になります。

研究は無限のことと言えます。

ここに言う方法とは、研究の手だてであります。

研究の無限に即応して、方法もまた無限であります。

私は、方法ということばを、ごく気がるくつかっています。無方法などということも言っています。無方法で進んでいくということなども、ふつうに考えています。

方法にはこだわらないのがよいという考えであります。

「無方法の方法」というようなことも、おもしろいのではないのでしょうか。

方法論とは何でしょう。私は、つぎのように考えます。

「方法の根源をなす理念を求めるのが方法論である。」と。

研究上、私どもは、無限に方法を案出していきます。これには、その案出の根源をなすものの自覚が肝要であります。根源的なものから、諸方法が発出してくるでしょう。

私どもは、自己の研究の道に立って、仕事の方法を考案します。ひるがえっては、方法の根源をたしかなものにしようとしめます。以上のようにして、自己の研究作業を組織していきます、体系的な研究作品を得ようとしめます。

※

※

※

私どもが、もし、自己の言語研究にあつて、ひとえに西洋言語学の方法にしたがうとしますか。ここには、方法的な自覚の弱さがあると云えるかもしれません。

もとより、進歩しているものに随順することは、よいことにちがいありません。が、ここにも、日本の研究の不進歩を問題にする方法論がいろいろあります。

無限の研究は、無限の開拓とも言えるものでありましょう。——このような方法的反省のもとで、私は、方法の把握につとめたいと思います。

本編 「方法」内化

